

音楽教育におけるファシリテーターの役割

～国際バカロレア(IB)初等教育プログラム(PYP)と小学校学習指導要領の比較をもとに～

安江 真由美
愛知学泉大学

A role of facilitator in the music education

Comparison of between International Baccalaureate (IB) Primary Years Programme (PYP)
and the elementary school curriculum of Ministry of science and technology(MEXT).

Mayumi Yasue

キーワード：ファシリテーター Facilitator、プライマリーイヤーズプログラム PYP (Primary Years Programme)、小学校学習指導要領 Elementary school curriculum

1. はじめに

平成 29 年改訂小学校学習指導要領（以下、新指導要領と記す）のもととなった中央教育審議会（2016）「平成 28 年 12 月 21 日答申」において、「多様な文脈が複雑に入り交じった環境の中でも、場面や状況を理解して自ら目的を設定し、その目的に応じて必要な情報を見だし、情報を基に深く理解して自分の考えをまとめたり、相手にふさわしい表現を工夫したり、答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだしたりすることができるという強みを持っている¹⁾」と示されている。この考え方は、国際バカロレア²⁾（以下：IB と記す）の初等教育プログラム³⁾（以下：PYP と記す）に共通するものがある。なぜなら、IB では生涯を通して思考の基盤となる普遍的な「概念」をすべての学習において知っていくからである。また、発達段階によっては、授業を主体的かつ協働的に子ども自身で構成していくからである。これは、新指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」（アクティブラーニング）にも関連する。このことについて、文部科学省（以下：文科省）の国際課企画室室長である原田大地は、「日本の教育が目指している方向性と IB は、親和性が高い」と発言していた⁴⁾。

近年広がりを見せつつある IB についての研究は

各地で発表されているが、音楽に関する先行研究はほとんど見られない。特に PYP については、筆者が関連しているものがほとんどである⁵⁾。これまで筆者は、IB の PYP はコンピテンシー、文科省『小学校学習指導要領解説 音楽編』（2008）はコンテンツがベースになっているという見解を示した⁶⁾。また、PYP と幼稚園教育要領・小学校学習指導要領、いずれにおいても音楽を探究的に学ぶことは可能であり、またそのような活動によって子どもの知的好奇心が旺盛になり、子どもの中に自然と音楽の本質が身に付くという見解に至った。さらに事例分析によって、この活動時に子どもたちは、消極的になったり、付和雷同的になったりするということが少ないということも明らかにした。その際教師は、音楽を強制的なものとして子どもたちに与えることは少ないことも示した。そういった場合に教師は、「発問」や「環境構成」等の手立てを行っていた⁷⁾。これに続き、探究的に音楽の学習をすすめるための「発問」に着目した⁸⁾。この「発問」は、「探究計画書（指導計画）」や「教材」、「知識構築」等における手立ても当てはまると考えられる。

以上を踏まえて、本研究では、「探究計画書（指導計画）」や「発問」、「教材」をもとに音楽教育におけるファシリテーターの役割について記すこととする。

なお、教師の役割について、特にファシリテートすることが大切だと示す理由として、筆者が修士課程在学時に執筆した「国際バカロレア（IB）と日本の学校教育における教師の役割についての一考察—初等教育課程に着目して—⁹⁾」がある。その中で、日本の小学校学習指導要領では、総合的な学習の時間や特別活動等においては、ファシリテーターの役割を行うことが可能であると示した。たしかに、教科教育についても小学校学習指導要領の上では、教師の指導の方法は地域や児童生徒の実態に応じて教師が創意工夫するため任意であるとも考えられるため、比較的自由ではある。しかし、現場においては指導の方法に認識の違いがあり、偏りがあるのではないかという見解を小学校学習指導要領の示し方等を根拠にして示した。その上で、指導の方法には習得・活用・履修・探究等、様々な方法があることも示した。そこで、本稿では、教科教育、特に音楽科においてファシリテーターの役割を担うということの意義について明らかにしたいと考える。

研究方法は文献研究を中心とする。特に PYP と小学校学習指導要領の比較を行う。PYP の資料としては、国際バカロレア機構 (International Baccalaureate Organization : IB0) の資料より *Making the PYP happen* (2009) および *Arts scope and sequence* (2009) を用いる。一方、日本の資料としては、「文科省『小学校学習指導要領解説 音楽編』(2008)」及び「文科省『小学校学習指導要領解説 音楽編』(2017)」を用いる。

2. ファシリテーターについて

ファシリテーター (facilitator) とは、リースによれば、メンバーの参加を促しながら、グループを導き、グループの作業を容易にする人のことである¹⁰⁾。特に、グループのメンバーが自由に作業をする仕組みをつくりあげ、様々な制約のある現場で、柔軟に、独創的に作業することを助けることを遂行できる者は優れたファシリテーターであると示している¹¹⁾。

一方、林は、教育の現場におけるファシリテーターについて「従来の指導者や講師とは異なり、一方的な知識・技能を教授するわけではない。あくまでも、個々のグループ学習が円滑に進むように、適切な助言を与えたり、当初の課題に立ち返って学習を進める方向を軌道修正したりする役割を担う¹²⁾と

している。また、ファシリテーターに求められる資質・能力として、「話題・情報提供力」、「質問力」、「決断力・判断力」を挙げている¹³⁾。

以上のことを踏まえて、ファシリテーターの役割について考えた結果、次の3つを設定した。

(1) 話題や情報を提供する

子どもたちが試行錯誤しながらも、「学びたい」、「もっと知りたい」、「自分で考えたい」、「考えることは楽しい」と思えるような話題や情報を提供し、カリキュラムを仕組んでいくことが求められる。そのために、子どもたちが考える手立てとして用いる参考文献や情報を事前に調べたり、探したりして、授業の用意に時間をかける。

(2) 効果的な発問等の声掛けをする

効果的な発問等の声掛けをするためには、子どもたちが見落としていた盲点や課題の核心に迫るような問いかけ等を行うことが必要である。そこから、子どもたちの学びが深まったり、貴重な気づきが生まれたりすることがあるからである。このような効果的な発問等の声掛けを行うには、子どもたち一人ひとりの既知の事象や興味、関心等を把握することや、カリキュラムを省察すること、また、学習のプロセスを観察すること、どのような過程から効果を導いたのかということ、さらに、各グループおよび全体の動向を正確に把握することといった、ファシリテーターの高い専門性が必要である。

(3) 子どもの育ちを支える環境をつくり出す

子どもが新しい考えや理解を生み出すには、学んだものを再生するだけでなく、活用したり解決したりすることが大切である。そういったことを通して「知識構築」が起こる。そのため、それまでに得た知識の質・量をもとに、様々な情報等を調べることを通して、気づいたことや新しく知ったこと等を音や言葉等の媒体によって表現するだけならば、知識を再生しているだけといえる。そうではなく、問題解決等を実施して活用し、解決させることが必要である。そういった子どもの育ちを支える環境（人的・物的・質的等）をつくり出すことが重要である。

以上3つを踏まえ、教育の現場において現在求められているファシリテーターは、各自の専門性や人間性等を踏まえて、あくまで中立的な立場から活動の支援を行い、広義における環境を構成する者と定義する。

3. ファシリテーターの役割比較

本項では、PYP と小学校学習指導要領解説音楽編を対象にファシリテーターの役割を、「探究計画書（指導計画）の作成」、「発問の考案」、「教材の選択」の観点から考察する。

(1) PYP

IB では、教師は子どもたちが自発的に学ぶことをサポートするファシリテーターの立場をとることとなっている。なお、子どもがその立場をとってもよい。その場合は、子どもがモデリングできるように教師があらかじめ模範を示しておく。また、教師は子どもたちをファシリテートするために、教師間によるコラボレーションを行う。さらに、PYP では、一人ひとりの子どもの成長を段階的に把握している。個々の子どもの学びを内容や結果によって段階分けしているのである。あくまでも内容や結果によるため、学習の内容や結果によっては、段階が一時的に下がることも起こりうる。つまり、「行きつ戻りつ」するのである。

さらに、ファシリテーターは、探究の精神と明確な目的意識をもつことが大切である。その上で、子どもの成長を考えて、多種多様な指導方法や形式に対応できる学びの過程を示唆したり、提案したりする。そのため、まわりのファシリテーターと共に自らの指導方法等を改善していくことも求められている。それは、自らの強みやアイディアを共有すること、および振り返りを行うことにつながる。そうすることで、教師は子どもにとって必要不可欠だとされている「スキル」や「姿勢」等の模範をも示すこと可能となる。

先に示した振り返りの一助として、*Making the happen* (2009) に芸術を実践指導する上で必要とされる教師の役割を示した一般例がある。次に示す表 1 は、ファシリテーターの役割について整理したものである。芸術を実践指導する上で教師の役割における考え方が変更されてきていることを表している。

なお、表 1 の比較の対象の根拠は、定かでない。なぜなら、現行 *Making the happen* (2009) の比較の対象となるであろう *Making the happen* (2000) に芸術におけるファシリテーターの役割が示されていないからである。ちなみに、*Making the happen* (2000) のこの項目に他の学問的視点（教科）である数学等については記載されているが、芸術においては記されていない。

表 1 PYP におけるファシリテーターの役割の変化

芸術を実践指導する上で変更されてきている点	
強調されるようになった点	強調されなくなった点
学級担任や他の専科教師との「協働計画」や話し合いを行う	他の教師と協働せず、個人的に計画をする
芸術の教師が、「探究の単元(UOI)」の策定や、セントラルアイデアの規定のプロセスにかかわる。	学級担任が「探究の単元(UOI)」を策定し、セントラルアイデアを規定し、芸術教師に広める
概念理解を設定する。	テーマを設定する。すなわち、特定のテーマやトピックに関連した演劇、作曲、ダンスまたは美術作品などに取り組む。
芸術の教師を PYP の教師と見なす（教師自身もそのように自覚する）。	芸術の教師を単に専科教員と見なす。
子どもたちは、学校や地域社会の様々な場所で学習し、観察し、演じる。	子どもたちは授業のために芸術の部屋に居続けなければならない。
芸術を探究の手段（方法）とする。	芸術は PYP の他の分野を支えるために存在する。
さまざまな様式、活動、評価、芸術的な体験を行う。	教科書を主として芸術のカリキュラムを進行する。
子どもたちは多文化、ジャンル、時代や言語の芸術に触れる。	子どもたちは、1つの文化からの芸術にのみ、アクセスすることを許される。
子どもたちの発問は芸術のプロジェクトを進める。そして、個々の創造性を価値づけ、促進する。	教師が主導する芸術プロジェクトを行う。
芸術経験の背後にある概念をより深く理解する	芸術的な慣習を表面的に使用する。
最終的な成果だけでなく、創造的なプロセスを含めて、すべての段階を通した定期的な子どもたちの理解を評価する。	最終の成果や実技のみの評価を実施する。 最終成果物やパフォーマンスのみ評価を行う

（以上、音楽を包含する芸術における教師の役割について、

Making the happen (2009) をもとに作成)

1) 探究計画書 (Planning the inquiry) の作成

「探究計画書 (Planning the inquiry)」は、指導案にあたるもので、「探究の単位」(Unit Of Inquiry : 以下 UOI) ごとに作成される。UOI における学びのテーマは全部で 6 つ存在する。すなわち、「私たちは誰なのか」「私たちはどのような時代と場所にいるのか」「私たちはどのように自分を表現するか」「世界はどのような仕組みになっているのか」「私たちは自分たちをどう組織しているのか」「この地球を共有すること」である。これらはすべて、様々な領域の教師が関わってコラボレーションすることとなっている。なお、先に示した学びのテーマは「5 つの基本要素¹⁵⁾」の中の「知識」に包含される「教科の枠を超えるテーマ (Transdisciplinary Themes)」に設定されているもので、毎年変わらない。したがって、発達段階によっては、子どもが「探究計画書 (Planning the inquiry)」を教師の見守り等のもと、作成してもよいとされている。また、子どもによって学びの段階が異なるため、スコープとシーケンスが 4 つの段階とその前後の段階として定められている。

また、「探究計画書 (Planning the inquiry)」のフォーマットに記されている代名詞はすべて、「We (私たち)」となっている。このことからわかるように、学びの対象は子どもだけではない。教師も含むのである。教師は、一人ひとりの子どもの興味や関心、ニーズ、能力を把握して、教育者としての自分を磨いていくことが求められている。

さらに IB のカリキュラムは、3 つからなっている。すなわち、「計画カリキュラム」、「授業カリキュラム」、「評価カリキュラム」である¹⁴⁾。基本的には、この 3 つのカリキュラムをひとまとまりとして「探究計画書 (Planning the inquiry)」を作成する。

2) 発問の考案

Making the happen(2009)には、「Teacher/Student」と記されている発問の箇所が多々ある。これは、発問を教師および子どもの両者がしてもよいと考えられていると思われる(表 2)。したがって、子どもも仲間をファシリテートすることが可能と読み取れよう。

また、発問は「5 つの基本要素」である「概念」から作り出される。PYP において「概念」は、思考活動の基盤であり、学習の内容ともいえる。「概念」は 1 つの UOI において 3 つまで使用することとなっている。そして、1 年間に全ての「概念」をカバーすることが求められている。さらに、PYP のどの年

齢・「教科の域を超える教科 (Transdisciplinary Themes)」であっても、普遍的に用いるものである。つまり、子どもの発達段階に合わせて適宜調整して用いることができるのである。

「概念」があることで、PYP において大切にされている「探究」という学習の方法は目的のある「探究」となる。また、「概念」によって、抽象的な物事も理解できるようになる。さらに「概念」における質問の形態は似通っていることから、子どもたちは、永続的にその普遍的な「概念」について考えることが可能となる。いくつもの無秩序な知識とスキルの要素を優先順位や関連づけのないまま発達させることに力を注ぐのではなく、汎用的な「概念」をもとに子どもたちは命ある限り、物事に対して、探究していくことができるということになる。

なお、各学問的視点(教科)において、「概念」に沿った考え方や発問の例示がなされている(表 3)。その基盤となるものが表 2 である。これは、実際の授業において、リサーチツールとなるだけでなく、様々な専門をもつ教師がコラボレーションして UOI を計画するとき方向性や目的を定かにする際に役立つ。

表 2 「概念」における一般的な発問例

概念	一般的な発問例 (Teacher/Student)
Form 特徴・構造	それはどんなもの？
Function 機能・役割	どんな働きをするの？
Causation 原因・仕組	なぜそうなるの？
Change 変化・変容	どう変わっていくの？
Connection 関連・影響	他とどう繋がっているの？
Perspective 視点・視野	どのような見方があるの？
Responsibility 主体・責任	私たちは何をすべきなの？
Reflection 評価・反省	私たちはどうわかったの？

(以上、*Making the happen* (2009) をもとに作成)

前述したように、上記を基に、各学問的視点(教科)において、発問が例示されている。以下は、音楽の領域における「概念」をもとにした発問例である(表 3)。

表 3 音楽の領域における
「概念」を基にした発問例

概念	音楽 発問例 (Teacher/Student)
Form	・民謡の特徴は何ですか。
特徴・構造	・あなたにはこの音楽はどのように聴こえますか。
Function	・あなたはこの楽器でどのような音を創り出すことができますか。
機能・役割	・私たちが歌う際、このサインやシンボルは、何を意味していますか。
Causation	・なぜ安定したテンポがアンサンブル演奏において重要なのですか。
原因・仕組	・この音楽はどのような文化から生まれたと考えますか。
Change	・もし、テンポがアレグロからラルゴに変わったら、曲はどのように変わりますか。
変化・変容	・テーマが違う変奏は、主題とどのように違いますか。
Connection	・楽器のサイズは、楽器の音の高さとどのように関係していますか。
関連・影響	・どのような種類の式典であなたはこの音楽を聴くでしょうか。
Perspective	・この音楽はあなたをどのような気分になさせますか。
視点・視野	・このパターンや歌を演奏するために、どの楽器を選びますか。また、それはなぜですか。
Responsibility	・よい演奏をするために、グループ内の音楽家は、各々何ができますか。
主体・責任	・この楽器の手入れを私たちはどのようにできますか。
Reflection	・あなたは、あなたの作品に合う楽器や音源を選びましたか。また、それはなぜそれは合っている、または合っていないのですか。
評価・反省	・作品の雰囲気や歌詞になぜこの曲のテンポは適しているのですか。

(以上、*Making the happen* (2009) をもとに作成)

これらは、オープンエンド型の発問であり、探究が主体となる活動には欠かせないものである。また、こうした発問は調査や議論、詳細かつ熟考された返答を求めるものである。

なお、この例示に、具体的な UOI の名前や対象年齢、学習の概要等は記されていない。以前、A 市のインターナショナルスクールで PYP の教師にインタビューした際、「*Making the happen* (2009) には、PYP のファンダメンタルな部分しか記載されていない」と発言していた。

また、B 市のインターナショナルスクールで PYP の教師にインタビューした際は、「異なる専門をもつ教師同士でコラボレーションをするために、ミーティングや準備の時間を多くとらなくてはなりません」と述べていた。

以上から、*Making the happen* (2009) はあくまで基本であること、また教師らが目の前の子どもたちや学校、地域等の実態に応じて協働して発問を含む UOI をつくっていかねばならないことがわかった。

3) 教材の選択

PYP では、多視点から子どもを主体とした探究の世界に誘う。そのため、教科書は多くの場合において使用しない。したがって、教師が自ら授業の構成を練ったり、教材を作成したりする。また、子どもの作品や演奏自体が教材になることもある。あくまで、教師は、児童が「すでにもっている知識」および「新しい経験により得た知識」の関連づけを促進し、活用等する役割を担うのである。

また、PYP の集大成としてエキシビションを行う。教師は、エキシビションを実施することを念頭にディスカッション等を生み出すような教材を選択・作成することが望まれている。

(2) 小学校学習指導要領

学校教育法施行規則に基づいて学習指導要領（以下、指導要領と記す）が定められ、各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動、外国語活動ごとに目標と学習内容が示されている。

基本的に教授法は地域や児童生徒の実態に応じて教師が創意工夫するようになっている。そのため、教師がファシリテーターの役割を務めることも可能である。

しかしながら、日本では教師はどちらかというと「教える人」という意味合いが強い。生活科や総合的な学習の時間が導入されたときに「教師は支援者だ」という考えが広まったことがある。この時以来、教育現場では「支援」という考え方が広まった。考え方によっては、特別活動等だけでなく、教科教育においても、子どもが主体となって、授業を進行していくことも可能であろう。

また、指導要領の音楽編の上では1年ずつではなく、2年ごとに学習の内容等をまとめている。それは、2年という大きな時間軸の中でじっくり指導できるようにという意図からである。

1) 音楽科における指導計画の作成

指導計画の作成にあたっては、指導要領の中の指導内容のあとに「第4章 指導計画の作成と内容の取扱い」として示されている。例えば、6年間を見通した指導計画や年間指導計画、各題材の指導計画、各授業の指導計画などである。また、それぞれの関連に配慮することおよび評価の計画も併せて行うようにという記載もある¹⁶。

また、音楽科では、「表現」および「鑑賞」の活動を通して、「思考力、判断力、表現力等」、「知識」、「技能」に関する内容をそれぞれ単独で育成したり、習得させたりするのではなく、相互に関わらせた指導計画が作成され、実行される。その際、児童や学校の実態、指導の内容に応じて「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点から授業の手立てを考えていく。そして「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」は、1単位時間の授業の中でのではなく、題材などの内容や時間のまとまりの中で実現を図る。その際、様々な活動が見られる場面を設定して、多様な学習活動を組み合わせて授業を組み立てていく。

加えて、「深い学び」の実現に向けて音楽科は、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること」という見方・考え方を、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通して質の高い深い学びへと繋げていく。

さらに低学年においては、生活科等の他教科との関連を図ること、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連も考慮する。また、小学校の6年間において道徳科との関連も音楽科の特質に応じて行う。

他方、特徴的と考えられる事項として〔共通事項〕が挙げられる。これは、「音楽を形づくっている要素（音楽を特徴づけている要素・音楽の仕組み）」および「音符、休符、記号や用語」のことである。これらを子どもの発達や教材曲などの特質に応じて、各事項に適切なものを選択したり、関連付けたりしながら、見直しをもって繰り返し指導することで、学

習が深まっていくように扱う。

音楽科では以上を踏まえて、指導計画を立案する。

2) 発問の考案

教師は到達目標を勘案しつつ、様々な発問を構想する。しかしながら、発問に関してガイドライン等があるわけではない。

また、指導要領の解説には、「例えば」、「指導にあたっては」という記載から始まる文言が存在する。そこにおいては、授業の具体例が多く示されている。それらの用い方次第では、発問を考案することも可能である。

上記に応じて、教師は学習の場面設定をすることも求められている。具体的には、子どもが主体的に学習に取り組めるよう見通しを立てたり振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面、また、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面である。さらに、学びの深まりをつくりだすために、児童が考える場面と教師が教える場面である。上に示した4つの場面をどのように組み立てるかということが教師として仕組むべきところであろう。以上のような場面を設定する中で、教師は到達目標等を踏まえて、様々な発問を構想し実施する。

3) 教材の選択

基本的に教師は、指導要領に基づいて子どもに音楽を指導する。その際、多くの場合において指導要領に準拠した教科書を用いて授業が行う。指導要領には「学習の内容」が示されている。「授業の方法」については、教師の任意である。指導要領に示された「共通教材」は必ず扱わなくてはならないが、教師は地域や児童の実態に応じて、指導要領に示された指導内容をもとに教材を作成し授業することは可能である。

(3) 分析

PYPの教師は多くの場合、ファシリテーターの役割を担っている。そのため、探究という学習の方法が重視されているが、学びの内容によって指導の仕方は多様に変化するともいえる。

一方、日本の一条校の場合、役割については教師の任意である。多くの場合において、特別活動や総合的な学習の時間等では、ファシリテーターの役割を担っていることがある。音楽科においても、教師の考え方次第でファシリテーターの役割を担うことは可能であろう。

以下は、各視点における分析である。

1) 探究計画書および音楽科における指導計画の作成
まず類似点として、3点挙げることにする。

第一に、探究計画書ならば「反応」「創造」、音楽科における指導計画ならば、「表現」「鑑賞」をスコープとして考えて、それらに関わらせながら計画を立てる点が類似している。

第二に、探究計画書および音楽科における指導計画を立案するにあたり、資質・能力等を重視するという点が類している。ただし、文科省『小学校学習指導要領解説 音楽編』（2008）よりも文科省『小学校学習指導要領解説 音楽編』（2017）の方が、この点はより明確になっている。

第三に、子どもが学ぶ内容は、PYPの場合、個人の単位で4つの段階とその前後の段階に分けられる。学習の内容や結果によって、段階が下がることもあるため、「行きつ戻りつ」といえる。一方、小学校学習指導要領の場合、2学年ごとに分化される。それは、2年という大きな時間軸の中でじっくり指導できるようにという意図からである。どちらも大きなスパンで子どもを見ようとしている。そういった視点から考えるのならば、類似点といえよう。

次いで、相違点として5点挙げる。

第一に、探究計画書は授業に直結するものとしては、3つのカリキュラムから出来ている。一方、音楽科における指導計画は、評価について考慮するものと記してあるものの、授業に直結するものとして具体化するならば、1つの指導案となる。その点において差異が見られる。

また、探究計画書は、音楽の領域に特出したものではないが、書式や例示等がなされている。一方、音楽科における指導計画には、書式や例示は示されていない。

第二に、上記を立案したり、実行したりする者が異なる場合がある。探究計画書は、教師も子どもも立案したり執行したりしてよいこととされている。また、教師と一言で示したが、様々な専門をもつ教師がコラボレーションすることとなっている。対して、音楽科における指導計画は、教師が行うことが前提として記されている。この場合も複数の教師が共同で考えることもあるが、それはPYPのように複数の分野ではなく、音楽を専門とする教師に限られることが多い。また、基本的には授業者は一人である。

第三に、探究計画書および音楽科における指導計

画の立案、それ自体に関しても、異なりを見せる。上記のとおり、音楽科における指導案とは違い、探究計画書は、様々な専門をもつ教師同士によるコラボレーションが行われる。それは、子どもが「教科を超えるテーマ (Transdisciplinary Themes)」を各学問的視点（教科）から探究できるようにするためである。つまり、同一の課題を各々の視点からアプローチする。厳密に言えば音楽科における指導計画も生活科等を考慮したり、全学年ならば道徳を踏まえたりすることが大切とされているが、探究計画書でいうところのコラボレーションとは、意味合いが異なる。

第四に、〔共通事項〕は、文科省『小学校学習指導要領 音楽編』（2008）および（2017）にあって、PYPにないものである。これは、音楽を学ぶ上での視点として良いものであると考える。音楽科における指導計画の立案にあたっては、これをもとに目標設定が行われ、展開案が構想される。

第五に、資質・能力の示し方である。PYPの場合、用語として定義付けがなされ、それらを用いて探究する。一方、文科省『小学校学習指導要領解説 音楽編』（2017）においては、目標設定の仕方が、従来の「関心・意欲」「創意工夫」等から「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」と資質・能力ベースに変わろうとしている。これらはこれから評価規準となっていくであろう。したがって、音楽科における指導計画の作成の際にも示すことが求められてくると考える。

2) 発問の考案

PYPと日本の一条校の類似点を挙げる。それは、発問を授業において重視している点である。例えば、発問によって、子どもは興味や関心等を示す。また、発問することで子ども間・子ども教師間における学びのコミュニケーションが行われる。さらに、子どもたちの思考力が働いたり、言語活動が生まれたりする。場合によっては、子どもの考えを揺さぶることもできる。その種類としては、主発問や補助発問、拡散的発問、収束的発問等がある。そういったことを大切に授業進行しているところがPYPと日本の一条校の発問の考案において類似する点である。

一方、相違点としては、発問が体系的になっているのか否かということである。PYPの場合の発問は、「5つの基本要素」に包含される「概念」に沿って考案する。発問、それ自体は、各学問的視点（教科）

によって文言が変わる。しかし、基本となる「概念」について変更されることはない。つまり、「概念」は普遍的であるため、生涯学び続けるための軸にもなり、体系的に発問を設定する軸にもなる。

対して、日本の一条校に認定されている小学校の場合、たしかに PYP に類した発問はされている。しかし、発問が体系化されているわけではない。

3) 教材の選択

まず、類似点について示す。PYP の場合は、教師が自らの授業の構成を練ったり、教材を作成したりする。また、既成の教材を使用するときは、地域や目の前の子どもの実態や目的等に応じて選択する。一方、指導的意味合いが強い日本の一条校の教師も、学習指導要領に基づいた指導を遂行する上でファシリテーターという位置づけで指導することが可能である。小学校学習指導要領では「学習の内容」が示されているだけで、「授業の方法」については、教師の任意となっている。そのため、教材の選択については、小学校学習指導要領に準拠した教科書教材が基本であるが、地域や児童生徒の実態に応じて、教材を選択したり作成したりすることもできる。この点が、PYP と日本の一条校の教師の教材の選択について類するといえるところであろう。

次いで、相違点である。1 点目は、ディスカッションを生む教材を選択するか否かということである。PYP はエキシビションを踏まえて、ディスカッションに繋がる教材を選択することが望まれている。しかし、日本の一条校の教師はそういったことを踏まえて教材を選択しなくてよいこととなっている。

また、2 点目として、曲名等が具体的に設定されているか否かということである。文科省『小学校学習指導要領 音楽編』（2008）および（2017）には「共通教材」が設定されている。そのため、日本の一条校の教師は、第 5 学年・第 6 学年における各 4 曲中 3 曲を選択する以外は、「共通教材」として示されている全ての曲に取り組むこととなっている。一方、PYP に曲目を指定するような文言は見当たらない。

4. 考察

子どもが音や音楽について楽しんで取り組んでいるうちに自然と音楽の本質が身に付いていたという活動の流れは、理想的である。そのためには、子どもにも興味や関心を抱かせることが大切である。では、

この場合の教師の手立ては何かというと、音楽を強制的に与えないということであろう。PYP において教師がファシリテーターの役割を担うことは必須である。日本の一条校の教師の位置づけも考え方次第では、類するものにすることが可能である。では、ファシリテーターである教師の役割は何かといえば、各自の専門性や人間性等を踏まえて、あくまで中立的な立場から活動の支援を行い、広義における環境を構成する者である。具体的には、こちらの意図を明確化させる思考活動や言語活動等を生み出す発問や指針を与えるような言葉掛けを行ったり、話し合いを組織したり、子どもの興味や関心を引き出すような計画を立案して、教材を選択・作成したりすること等である。このために、必要と考えられることは次に示す 3 点である。

第一に、確かな専門性である。音楽を専門としているからこそ、次に示す内容について精通していたり学習し続けていたりするべきである。すなわち、内容的側面・文化的側面・形式的側面・情意的側面・技能的側面等である。これらを踏まえることで、ファシリテーターである教師は、根拠をもった的確な発問・指示・説明等が可能となる。また、教材も選択・作成等が可能となる。

つまり、教科等の確かな専門性があるのはじめて、子どもたちを意図的に教科の本質へと誘い込めるのである。

第二に、カリキュラムの作成力である。思考活動等、子どもが多様な学習活動を実施できるような場面を設定して、授業を組み立てていくことが大切である。子どもは、「何がどうなっているのか」、「もっと知りたい」というような興味を抱くと、質問したり、探究したり、自発的に行動したりしようとする。そのような手立てを仕組むには、カリキュラムの作成力が高いことも必要であると考ええる。これについては、『小学校学習指導要領解説 音楽編』をもとに、いかに柔軟に授業を組み立てていくのか、それが日本の一条校において授業を行う教師にとって大切なことであると考ええる。カリキュラムの作成力が高ければ、子どもたちの学び方や振り返り方等が多様になり、学びのプロセスや結果等に直結するであろう。

第三に、知識構築を図るための手立てを仕組む力である。子どもの育ちを支えるために、子どもが蓄積してきた知見を組み合わせさせたり、学びを再生・活用・解決させたりして、問題解決等をさせる

ことが大切である。そのためにファシリテーターである教師は、個々の子どもの成長を継続的に把握し、何に対して興味をもっているかを知って、理解しようとするのが重要である。その上で、子ども一人ひとりのニーズや能力に応じて多様な手立てを仕組むことが大切である。

また、自作や他の人が考案した音や音楽に対するプレゼンテーション力・スピーチ力もさることながら、音楽作品について多角的な視点から話し合うことができたり、提案や発問等を投げかけたりすることができるようなディベート力も必要であろう。さらに、子どもと共に音や音楽を楽しむことも大切なことである。そういったことを通して、子どもの知識構築の手助けができると考える。

以上から目的に応じた環境（人的・物的・質的等）を構成することがファシリテーターの役割であると考えられる。ファシリテーターである教師自身も子どもの育ちを支える環境の一部である。教科教育においては、確かな専門性を基にカリキュラムを作成したり、子どもの知識を構築させたりする手立てを仕組むことが大切である。

例えば、音楽の授業で教師がファシリテーターの役割を果たすことで、子どもたちは、音や音楽を楽しみながら主体的に探究できるようになるであろう。そこではPYPに示された「5つの基本要素」に包含される「知識」や「概念」等が養われる。そして、最終的にはIBがめざす「10の学習者像」に含まれる「探究する人」や「考える人」等を実現する上で有効となるであろう。

5. 今後の課題

今後の課題は、4点ある。まず、PYPの知見から、教師だけでなく、子どもも発達段階によっては、ファシリテーターになり得るとあることから、その具体について研究を深めたい。他方、PYPにおいて、ICTは探究および概念の理解のツールとして多大に活用されている。文科省『小学校学習指導要領解説音楽編』（2017）にも重視するようという記載がある。ファシリテーターの役割を担う者が如何にICTを活かして到達目標に達するのか、研究したい。

第二に、探究計画書と音楽科における指導計画の違いについて具体的に明らかにしたいと考える。

第三に、スコープとシーケンスとの関連¹⁷につい

ても研究したいと考える。

最後に、IBで使用されている用語の用い方についてである。8つの「概念」等、基本的なIBの用語において、IBから認定を受けた一条校において音楽の授業を実施する場合や一般の公立校においてPYPに類似した授業を実施する場合、英語を訳した日本語を使用することが考えられる。しかしながら訳出によっては、英語の場合のニュアンスとは意味合いが異なってくると考える。このことについてどのように対応していくのか、課題としたい。

6. おわりに

PYPは、良い意味で世界の教育の良い点を切り貼りしたような教育である。そのため、よくできているといえる。だからこそ、それらを活かすファシリテーターの役割が非常に大きいと考えられる。

他方、日本においても、カリキュラム構成の重要性が示されている¹⁸。なぜなら、一国のカリキュラムである学習指導要領は、教育の基準を示したものである。学習指導要領をいかに現場の実態に合わせて落とし込むのか、評価の基準をも想定して、授業を組み立てるのか、それが重要なことであると考えた。

また、これからは日本においても、学問的要請（文化的要請）に加えて、発達段階を踏まえた心理的要請、社会的要請というようなカリキュラム構成の3本柱を重視していく必要がある。特に社会的要請という面から記すならば、OECDにおいて提示されている「PISA型学力」、経済産業省において示されている「社会人基礎力」等との関連についても考慮していく必要があろう。その際、PYPの理念を具体化した「10の学習者像」に加えて、「5つの基本要素」に包含される「概念」、「知識」、「学習の姿勢（スキル）」、「態度」、「行動」が示唆を与えると考える。

註

1) 中央教育審議会：「平成28年12月21日答申」pp10-11（2016）

2) IBの教育プログラムは、3歳から19歳までの子どもたちを対象としたものである。どこかの国に属するカリキュラムを採用することはなく、多数の国々のカリキュラムの優れた点を合わせた教育プログラムである。この教育プログラムは、4つからなる。すなわち、PYP、MYP、DP、IBCCである。年齢区分としては、3～12歳は、PYP、11～16歳は、MYPである。

16～19 歳は、DP もしくは IBCC を選択することになる。なお、DP は、合格すると世界各国で認められている大学入学資格を得られる最終試験があるプログラムである。IBCC は、大学へ進学しない生徒を対象としたキャリア教育・職業教育に関連したプログラムとして2012年設置、2013年より実施されている。文科省は「Career-related Program : CP」と表記しているが、本論文では、国際バカロレア機構 (IBO) に従って IBCC を用いる。

加えて、すべてのプログラムにおいて理念を具体化した「10の学習者像」を目指すこととなっている。すなわち、「探究する人 (Inquirers)」、「知識のある人 (Knowledgeable)」、「考える人 (Thinkers)」、「コミュニケーションができる人 (Communicators)」、「信念をもつ人 (Principled)」、「心を開く人 (Open-minded)」、「思いやりのある人 (Caring)」、「挑戦する人 (Risk-takers)」、「バランスのとれた人 (Balanced)」、「振り返りができる人 (Reflective)」である。

3) PYP では、日本でいう国語や数学などの教科は単体として定められているわけではない。IB の理念を具体化した「10の学習者像」が定められ、それに基づいて、カリキュラム・フレームワークを行う。カリキュラム・フレームワークとは、相互に関係のある質問を伴う3つの「カリキュラム」と、「5つの基本要素」から成り立っている。

4) 「IB 導入の課題と展望」シンポジウムにおける発言 (平成29年7月22日早稲田大学)

5) 安江真由美、松永洋介: 「国際バカロレアにおける授業の目標設定についての一考察—音楽授業のモデルプランをもとに—」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』第65巻, 第1号 pp. 53-62 (2016)

6) 安江真由美: 「国際バカロレア (IB) と学習指導要領における音楽探究活動の比較—初等教育課程に着目して—」第21回全国大会、日本学校音楽実践学会 (平成28年8月20日北海道教育大学岩見沢校)

7) 安江真由美: 「国際バカロレア (IB) と学習指導要領における音楽探究活動の比較—初等教育課程に着目して—」『学校音楽教育実践論集』日本学校音楽教育実践学会, 第1号, pp. 79-80 (2017)

8) 安江真由美: 「国際バカロレア (IB) 初等教育プログラム (PYP) における学習を探究的に取り組むための音楽的な発問についての分析—小学校学習指導要領に基づいて指導する場合に着目して—」第22回全国大会、日本学校音楽実践学会 (平成29年8月20日聖徳大学)

9) 安江真由美: 『教師教育研究』第12号 岐阜大学教育学部 pp. 191-201, 本文記載事項の他、教師の位置づけについて教員免許状取得や教師の研修等についても明らかにした。 (2016)

10) フラン・リース、黒田由貴子および P.Y. インターナショナル訳: 『ファシリテーター型リーダーの時代』p. 6 (2002)

11) 同上書 p. 8

12) 林幸克: 「ファシリテーターとは」

長浦豊編: 『改訂 特別活動概論』p. 93 (2009)

13) 同上書 p. 93

14) 3つのカリキュラムとは、「計画カリキュラム (The Written Curriculum): 何を学びたいか」、「授業カリキュラム (The Taught Curriculum): どうしたら一番よく学べるか」、「評価カリキュラム (The Assessed Curriculum): どうしたら何を学んだかわかるのか」のことである。

15) 「5つの基本要素」には、「概念」、「知識」、「学習の姿勢 (スキル)」、「態度」、「行動」が包含されている。詳細を以下に示す。

「概念」: 本文に記載

「知識」: 各学問的視点 (教科) および教科の域を超えるテーマ (Transdisciplinary Themes) からなる。各学問的視点 (教科): 言語的視点、社会学的視点、数学的視点、芸術的視点、科学的視点、体育・道德的視点

教科の域を超えるテーマ (Transdisciplinary Themes): 本文に記載

「学習の姿勢 (スキル)」: 社会的スキル・リサーチスキル・思考スキル・自己管理スキル・コミュニケーションスキル

「態度」: 感謝・責任・自信・協力・創造性・好奇心・共感・熱意・自立・誠実・尊敬/尊重・寛容

「行動」: 探究・行動・振り返り

16) 文部科学省: 『小学校学習指導要領解説 音楽編』p. 103 (2017)

17) 田村も音楽に特出して発言したのでは無いが「スコープとシーケンスに一つ一つきっちりと分ける必要性はあるのかこれから考える」と「第6回関西大学初等研究発表会」鼎段及びシンポジウムにおいて発言していた。(平成28年2月6日関西大学初等部)

18) 文部科学省: 『小学校学習指導要領解説 音楽編』pp. 4-5 (2017)

参考文献

江里口歎人: IB教育がやってくる!、松柏社 (2014)
大迫弘和: 国際バカロレアを知るために、水王舎 (2014)

徳永保: グローバル人材の育成、協同出版株式会社 (2015)

International Baccalaureate Organization:
A basis for practice, pp. 1-2 (2009)

Workshop Leaders: D・Brittain & M・Nishita:
『Making the PYP happen in the Classroom』 (2013)

International Baccalaureate Organization:
What is an IB education? (2014)

International Baccalaureate Organization:
Programme standards and practices, pp. 1-16 (2014)